

郭店老子の組分けと竹簡の配列について

渡 邊 大

はじめに

一九九三年に中国湖北省荊門市郭店一号楚墓から出土した「郭店老子」⁽¹⁾の写真図版および釈文を載せた『郭店楚墓竹簡』が、一九九八年五月、文物出版社から公刊された。

「郭店老子」については、それまで新聞の報道や、整理作業に携わった研究者の報告などによりその概要が知られるのみであったが、『郭店楚墓竹簡』の公刊以後、「郭店老子」に関する論考・著作が多数発表されており、「馬王堆老子」に続く『老子』研究の新資料として、「郭店老子」に対する関心の高さを物語っている。

「郭店老子」が出土した郭店一号楚墓の下葬年代は、紀元前四世紀から前三世紀初めだとい⁽²⁾う。抄写は下葬に先立って行われるから、「郭店老子」は「馬王堆老子」をさらに百年あまりも遡る、現段階における最古の『老子』のテキストということになる。

従来、『老子』という書物の成立には多くの説が立てられてきた⁽³⁾。「郭店老子」はその解明に多くの手掛かりを与える貴重な資料である。しかし、出土資料には、その資料としての性質に根差した問題が常につきまとう⁽⁴⁾。我々は「郭店老子」を通して、当時の『老子』の姿、また『老子』の成立史を描こうとするわけだから、そのことに十分留意しなくてはならないが、そのためにはまず「郭店老子」そのものを明らかにする必要があるのはいうまでもない。そこで、本稿においては、『郭店楚墓竹簡』の整理結果をもとに、「郭店老子」の組分け、竹簡の配列などについて再検討し、さらに「郭店老子」と「馬王堆老子」、通行本『老子』との関係についても若干の考察をする。

「郭店老子」甲・乙・丙と「太一生水」の関係

郭店一号楚墓から出土した八〇四枚の竹簡は、それらをまとめていた編線の腐朽によって散乱し、順序はばらばら

になつていたといふ。⁽⁷⁾ 整理作業は、まず、竹簡を、長さ・両端の形状・編線の数およびその間隔によって組分け、続いて、それらを文意が疎通するように配列するという二段階を経て行われたと思われる。「郭店老子」も、簡式の違いによって甲(三九枚)・乙(一八枚)・丙(一四枚)の三組(計七一枚)に組分けがなされている。

『郭店楚墓竹簡』の「老子」甲・乙・丙を、「馬王堆老子」および今本『老子』と比較して気づくのは、字句の違いや、文言の多少などはあるものの、今本にない部分は全くないということである。整理作業の過程で今本『老子』に含まれない部分が排除されている可能性はないのだろうか。『郭店楚墓竹簡』には、甲・乙と全く同じ型式の竹簡は他にはないから、このふたつについては、もともと今本『老子』と共通する部分しかなかったと考えられる。しかし、『郭店楚墓竹簡』には、丙と全く同じ簡式の一簡が「太一生水」と名付けられて別に収録されている。『郭店楚墓竹簡』「太一生水」の【説明】に「其形制及書體均與老子丙相同、原來可能與老子丙合編一冊。」⁽⁸⁾とあるように、「太一生水」が丙とともに一篇をなしていた可能性は極めて高い。「太一生水」は明らかに道家思想に属す文献であり、『老子』との思想的関連も窺えるため、今本『老子』

の原型と考える研究者もいる。⁽¹⁰⁾ 本来別行していた書物を内容の共通性などから一篇にまとめて抄写することも十分にありうるから、「太一生水」を即『老子』の原型と考える事は出来ない。しかし、同一型式の竹簡に書かれ、一篇にまとめられていた可能性がある以上、最初から「太一生水」を「郭店老子」から切り離して扱うのは問題である。⁽¹¹⁾ そこで、本稿においては『郭店楚墓竹簡』の甲・乙・丙に、「太一生水」一四枚を加え、考察を進めていくことにする。

各組のグループピングと竹簡の配列・総数

簡式によって組分けされた甲・乙・丙および「太一生水」は、文意が通じるように並べ替えられることになる。その際、ある章が始まる場合、前の章に続いて竹簡の途中から始まる場合と、行を改めて簡の冒頭から始まる場合とがあるため、各組はさらにいくつかのまとまりに組分けられる。『郭店楚墓竹簡』第一二頁「老子釋文注釋」の【説明】においては、そのようなまとまりが「；」で示されている。しかし、『郭店楚墓竹簡』の公刊以前に、同様の作業を行っている「崔試論」「崔初探」⁽¹²⁾と比べるとその結果に違いがある。そこで『郭店楚墓竹簡』をもとに両説を比

較しながら、まず甲・乙・丙、次いで「太一生水」それぞれのグループピングについて考えてみる。

(一) 甲・乙・丙のグループピング

甲・乙・丙についての『郭店楚墓竹簡』の整理結果は、次のようにまとめられる。(A・B等の符号は便宜上筆者が附したものであり、()内の数字は、その組に含まれる内容が、今本『老子』の何章に相当するかを示す)

「甲組」⁽¹³⁾

A 第一号簡～第二〇号簡 (19・66・46・30・15・64・37・63・2・32)

B 第二一号簡～第二三号簡 (25・5)

C 第二四号簡 (16)

D 第二五号簡～第三二号簡 (64・56・57)

E 第三三三号簡～第三九号簡 (55・44・40・9)

「乙組」⁽¹⁴⁾

F 第一号簡～第八号簡 (59・48・20・13)

G 第九号簡～第二二号簡 (41)

H 第一三三号簡～第一八号簡 (52・45・54)

「丙組」⁽¹⁵⁾

I 第一号簡～第三号簡 (17・18)

J 第四号簡～第五号簡 (35)

K 第六号簡～第一〇号簡 (31)

L 第一一号簡～第一四号簡 (64)

甲・乙・丙の竹簡を配列するにあたっては、今本『老子』が参考となったと思われるが、それでも『郭店楚墓竹簡』と崔氏の整理結果には相違点が見られる。まず、崔氏は竹簡の総数を八六枚としている。これは、崔氏が「太一生水」を丙の一部としているのを考慮に入れても、『郭店楚墓竹簡』より一枚多い数である。また、崔氏は甲を六組に分けていて、これも『郭店楚墓竹簡』より一組多い。この二点にはともに甲・第一三三号簡冒頭の二字「能爲」が関わる。その前後は、今本の第六四章と第三七章に相当する部分である。問題となる二字を含む前後を引用する。

：是古聖人能專萬勿之自狀而弗(甲・第二二号簡)
能爲術互亡爲也：(甲・第一三三号簡)

この間には分章の標識は存在せず、段落の区切れは文脈から判断するしかない。⁽¹⁶⁾『郭店楚墓竹簡』は「能爲」の二字を第六四章相当部分の末尾と見做し、三字目から第三七

章相当部分が始まるとみている。すると、この第三章相当部分は簡の途中から始まるから、この前後はひとつのまとまりということになる。一方、崔氏は「能爲」を第三章の冒頭と見做している。すると、第一三号簡以下は第一二号簡以前とは別のまとまりとなる。つまり、『郭店楚墓竹簡』は「是の古(故)に聖人は能く萬勿(物)の自狀(然)を尊(轉)けて能く爲さず」とし、崔氏は「能く術(道)を爲すは互(恆)に爲すじきなり」としているわけである。ところが、崔氏の処置では第一二号簡の末尾「而弗」が意味をなさなくなる。そこで、崔氏は第一二号簡の直後に位置すべき「敢爲」で始まる竹簡が一枚欠けていると考えるのである。

今本『老子』をみると、第六四章末尾を「能爲」に作るテキストはなく、全て「敢爲」に作っている。「馬王堆老子」も、『韓非子』喻老篇も同様である。「郭店老子」ではこのほか丙にも第六四章相当部分が見えるがそこも「敢爲」に作っている。第六四章に関連する全てのテキストが「敢爲」に作っているため、崔氏は本来第一二号簡の直後に位置していた竹簡が失われていると判断したのである。しかし、この処置には問題がある。崔氏の説によれば、第一三号簡冒頭の「能爲」は、続く「術互亡爲也」に

連接することになるが、第三章冒頭はどのテキストも「道常無爲」あるいは「道常无爲」から始まっており、「能爲」で始まるものはない。また、「道を爲す」という表現だけについてみると『老子』の他章にもみえているが、「能く道を爲す」という表現は、『老子』には見えず、他の資料にもほとんど例をみない。第六四章末尾は「敢爲」に作るほうが、たしかに意味は通るが、そのために、崔氏のように「能爲」を第三章に連接させ、さらに「敢爲」に作る簡が欠けているとみるのには少々無理がある。やはり『郭店楚墓竹簡』のように、甲・第一二号簡冒頭の「能爲」は第六四章相当部分の末尾に当たると考えるべきであり、したがって、この前後もひとつのまとまりということになる。

(二) 「太一生水」のグループینگ

「太一生水」の竹簡の配列に関しては現存する文献に手掛かりが求められず、その配列は非常に困難であったろうと想像される。しかし、第一号簡から第八号簡については、『郭店楚墓竹簡』、崔氏ともに同様の整理結果に至っており、また、そのように配列することで、文意は極めて明瞭となるから、その配列に全く問題はない。問題となるのは、第九号簡以降の配列である。『郭店楚墓竹簡』の配列

にしたがって問題となる部分を引いてみる。

天道貴濁、雀成者以益生者、伐於彌黃於□□□□□□²¹⁾
□□「以上第九号簡」

下、土也、而胃之陸。上、巽也、而胃之天。道亦丌忒也。青昏丌名。以「第一〇号簡」道從事者必恠丌名、古事成而身長。聖人之從事也、亦恠丌「以上第一一号簡」名、古衺成而身不剔。天陸名忒並立、古恠丌方、不由相□□□□□□²²⁾「以上第一二号簡」

於西北、丌下高以彌。陸不足於東南、丌上「低以彌。不足於上」²³⁾「以上第一三号簡」者、又余於下。不足於下者、又余於上。²⁴⁾「以上第一四号簡」

第一〇号簡～第一二号簡、第一三号簡～第一四号簡は、このように配列することでそれぞれ意味が疎通するから、ひとつのまとまりとなることが確認でき、また、この点については両者一致している。しかし、第一三号簡は、下文に「陸不足於東南」とあり、文脈上から「天不足」という句に連なっていると考えられるが、第九号

簡、第一二号簡の下部がともに欠けているため、どちらの竹簡の直後に位置していたかが問題となる。『郭店楚墓竹簡』は第一三号簡は第一二号簡に続くものとし、崔氏は第九号簡を第一三号簡の直前に位置すべきものとしている。

第一三号簡～第一四号簡は、西北が高く東南が低いという中国大陸の地理的特徴を例として挙げ、何かが多ければ、その代わりに必ず何かが足りなくなるものだと結論づけている。第九号簡は、天道が濁(弱)を好むことをいい、成(性)を雀(削)ろうとしたり生を益そうとしたりすると、かえって伐たれてしまうという。これは、成(性)や生といった人間に本来備わったものは、そのあるがままにあるべきだという主張である。このようなことさらな行為の否定は、第一三号簡以下にみえるような思想を背景に持っていると考えられる。何かを得ようとするとかかを失うからこそ、何かを求める行為は無意味となるからである。一方、第一〇号簡～第一二号簡は「天」「地」といった用語の点では第一三号簡～第一四号簡と共通するものの、その主な関心は「名」や「字」による聖人の政治にあり、その目的は「衺(功)成り、身剔(傷)われず」という点にあるから、内容的には関連するといえない。よって、「太一生水」は、崔氏に従って竹簡を配列すべきであり、丙本につづけて、

次のようにグループピングすることができらる。

M 「太一生水」第一号簡（第八号簡）

N 「太一生水」第一〇号簡（第二二号簡）

O 「太一生水」第九号簡、第二三号簡、第一四号簡

以上、甲・乙・丙および「太一生水」について『郭店楚墓竹簡』および崔氏の説を比較しながら、各組のグループと竹簡の配列についての検討を行った。AからOの各グループ内の竹簡の配列についてはこのように確定できる。甲・乙・丙各グループ内の配列をみると、今本『老子』の章序と一致するものは、甲Dの第五六章・第五七章と丙Aの第一七章・第一八章のみである。各グループをどのように組み合わせても、今本および「馬王堆老子」の章序と一致するものはこの二例以外にない。甲・乙・丙および「太一生水」それぞれの各グループどうしが実際にどのような組み合わせで一篇となっていたかについては、さらに検討を加える必要があるが、いずれにしても「郭店老子」における章次は今本および「馬王堆老子」とは隔たりが大きいといえる。⁽²⁷⁾

また、以上の結果から、『郭店楚墓竹簡』の整理者が示

唆している盗掘による被書の可能性についてはそれを否定することが出来る。「郭店老子」には、今本『老子』の三一章分に相当する内容が含まれている。今、整理した竹簡をみると、断簡は勿論存在しているが、それでも隣り合う竹簡どうしの文意は明らかに連続しており、竹簡が一本まると欠けていると思われるような部分は全く存在しない。仮に、盗掘により失われた竹簡があるとすれば、盗掘者は、この三一章以外の部分だけを選っていたということになる。しかし、竹簡はばらばらになっていたのであり、実際にはそのようなことは不可能であるから、少なくとも、甲・乙・丙および「太一生水」については、盗掘による被害はなかったと考えられる。⁽²⁸⁾ それぞれの祖本についてはともかく、実際に抄写され、副葬品として納められた竹簡は、甲三九枚、乙一八枚、丙一四枚、「太一生水」一四枚であったと断定してよい。

甲・乙・丙の相互関係および「馬王堆老子」・今本との関係

甲・乙・丙はそれぞれが異なる型式の竹簡に抄写されているが、互いにどのような関係にあるのだろうか。甲Aと丙Iには、極めて似通った箇所がひとつある。それを通してこの点について考えてみる。まず両者を引く。

甲・第一〇号簡／第一三号簡

爲之者敗之、執之者遠之。是以聖人亡爲、古亡敗。亡執、故亡避、臨事之紀、誓終如忒。此亡敗事矣。聖人谷不谷、不貴難得之貨、季不季、復衆之所化。是古聖人能專萬勿之自狀而弗能爲。

丙・第一一号簡／第一四号簡

爲之者・之、執之者避之一。聖人無爲、古無敗也。無執、古□□□。新終若訃則無敗事喜一。人之敗也、互於兀厭成也敗之一。是以□人欲不欲、不貴難得之貨、學不學、復衆人之所化一。是以能補壻勿之自狀而弗敢爲。

両者は、明らかに今本『老子』第六章に相当する部分であるが、細かい点については異同がある。例えば、対応する字句について、次のような違いが見られる。

甲A	「遠」	「亡」	「如」	「季(敎)」
丙L	「避(失)」	「無」	「若」	「學」

また、甲にある「臨事之紀」の句は丙にはなく、丙にある「人之敗也、互於兀厭成也敗之」は甲には見えない。このような違いがみられるのは両者が異なるテキストから抄写されたためであろう。甲・乙・丙の三篇が異なる型式の竹簡に写されているのも、それぞれが独自に抄写されたためと考えられる。

次に、「郭店老子」と「馬王堆老子」および今本『老子』との関係についても考えてみよう。今本『老子』はテキストによって字句を異なって作る場合がある。例えば、第一章の冒頭は、王弼注本・河上公注本・想爾注本が「古之善爲士者」に作る一方で、傅奕本は「古之善爲道者」に作っている。この部分を、「馬王堆老子」乙本は「古之□爲道者」に作り、⁽³³⁾「郭店老子」甲・第八号簡は「長古之爲士者」に作っている。つまり、今本に見られる違いは「馬王堆老子」「郭店老子」においてすでに生じているのである。このことから、『老子』のテキストは、「郭店老子」↓「馬王堆老子」↓今本へと直線的に繋がっているわけではないということが分かる。当時、「郭店老子」の他にも複数のテキストが存在しており、それが今本の文字の異同にも反映されていると考えられる。今本の異同は劉向・劉歆の校書以降に生じたものばかりではないのである。⁽³⁴⁾

また、「郭店老子」については、それをすでに完成して
いる『老子』五千言の節略本と見做すか、それともいまだ
形成途上にある今本『老子』の原型と見做すか、対立する
ふたつの見方がある。⁽³⁵⁾しかし、どちらの立場からも「郭店
老子」を説明することは可能であり、「郭店老子」のみか
らこの点について結論を導きだすのは困難である。⁽³⁶⁾但し、
いずれにしても「郭店老子」は、ひとつの書物として、す
でにある程度まとまっていたことは明らかである。「郭店
老子」が片言雙句の寄せ集めに過ぎないのであれば、そこ
には、今本『老子』にならない「道家言」がもっと多く入り込
んでいるはずである。ところが、丙はともかく、甲・乙に
は今本『老子』と同じ文言しかみえない。つまり、「郭店
老子」当時、『老子』は、「老子」という名称こそ持ってい
なかつたものの、その形成過程においてすでにある程度の
段階に達していたと考えられるのである。

むすび

以上、「郭店老子」甲・乙・丙および「太一生水」につ
いて、『郭店楚墓竹簡』の整理結果をもとに、その組分け
や竹簡の配列・総数などについて検討した。その結果、そ
れぞれ五組・三九枚、三組・一八枚、四組・一四枚、三組

一四枚と確定し、その組分け・配列についても多少の修正
を行った。また「郭店老子」を「馬王堆老子」、今本『老
子』と比較し、その『老子』成立史における位置について
も若干の考察を加え、「郭店老子」当時には『老子』はそ
の成立史においてすでに一定の段階に達していたとの見解
に至った。

今後、各組の異体字や符号の分布などを調査することで
さらに各組どうしの配列についても明らかにすることがで
きるだろう。また、「馬王堆老子」および今本『老子』と
の比較を進めることによって、『老子』の成立や道家思想
の展開についても新たな知見を加えることが期待できる。

注

- (1) 「馬王堆老子」と同様「郭店老子」にも「老子」という書
名は附されていなかった。澤田多喜男『帛書老子』考―書名
〈老子〉成立過程時期初探(『中国―社会と文化』四、東大中
国学会、一九八九年)が指摘するように、「老子」という書名が
いっ生まれ定着したかということはひとつの問題ではあるが、本
稿で取り上げる郭店出土の竹簡は明らかに今本『老子』と関わ
る資料であるから、以上のような事情をふまえて、「郭店老
子」と称することにする。

(2) 『郭店楚墓竹簡』公刊以前の主な報道・報告を以下に掲げる。「」内は本稿で用いる略称。彭浩「論郭店楚簡中的老學著作」(中国出土資料研究会『中国出土資料研究会会報』第四号、谷中信一「北京管見録」所載、一九九六年一月)、「彭論郭店楚簡」、崔仁义「试论荆门竹简《老子》的年代」、「荆门大学学报」(哲学社会科学版)一九九七年第二期、「崔試論」、湖北省荆门市博物馆「荆门郭店一号楚墓」(《文物》一九九七年第七期)、「博物館発掘報告」、崔仁义「荆门楚墓出土的竹简《老子》初探」(『荆门社会科学』一九九七年第五期)、「崔初探」。

(3) 『郭店楚墓竹簡』以後の主な論考・著作を以下に掲げる。「」内は本稿で用いる略称。「美国」郭店《老子》国際研究会「综述」(『国際儒学联合会会報』一九九八年第二期、六月)、「国際研討会综述」、「郭店楚墓竹簡」学术研討会述要(同上)、「學術研討会述要」、郭沂「从郭店楚簡《老子》看老子其人其書」、「哲学研究」一九九八年第七期、七月)、「郭老子其人其書」、池田知久「アメリカ、ダートマス大學「郭店老子」国際研討會」(『東方學』第九六輯、一九九八年七月)、「池田国際研討會報告」、池田知久「形成途上にある最古のテキストとしての郭店楚墓《老子》」(東京大學中國思想文化學研究室、一九九八年八月)、「池田論文」、丁原植「郭店竹簡老子釋析與研究」(萬卷樓圖書、一九九八年九月)、「丁釈析」、高明「读郭店《老子》」(『中国文物報』一九九八年一〇月二八日)、「高説老子」、彭浩「谈郭店《老子》」(同上)、「彭分章和章次」、李家浩「关于郭店《老子》乙组一支残简的拼接」(同上)、「李残

簡拼接」、崔仁义「荆门郭店楚簡《老子》研究」(科学出版社、一九九八年一〇月)、「崔研究」、郭沂「试谈楚簡《太一生水》及其与简本《老子》的关系」(『中国哲学史』一九九八年第四期、一月)、「郭試談」。

(4) 「崔試論」、「博物館発掘報告」参照。

(5) 「任繼愈《老子新譯》(修訂版、上海古籍出版社、一九八五年)参照。

(6) 「郭店老子」は、「馬王堆老子」同様、基本的にユニークなテキストとして扱うべき資料である。当時の書物は後世の版本のようなマスプロダクトではないし、また、劉向が書物を校訂し定本を確定する以前は、ひとつの書物であっても、そのテキストは非常に不安定なものだったからである。例えば、「郭店老子」甲・第一号簡には「恧(愚)棄(愚)、民復(復)季(季)子。」とある。これは今本第十九章の「絶仁棄義、民復(復)孝慈。」にあたる。「郭店楚墓竹簡」の釈文は「恧」を「偽」の仮借、「恧」を「詐」の仮借としている。これによれば、従来『老子』についていわれてきたような儒家の仁義説に対する否定的態度は「郭店老子」にはみられないことになる。一方、「国際研討会综述」には「恧」を「義」の仮借、「恧」を「仁」の仮借とする高明の説が紹介されている。これによれば、「郭店老子」は今本同様仁義を否定的にとらえていることになる(もともと「高説老子」では「恧」を「仁」の仮借とする説については撤回している)。どちらが「郭店老子」の本来の姿であるのかその判断は困難であり、またどちらが正しくとも当時あった全てのテキストが

「郭店老子」と同様に作っていたのかはさらに問題として残る。

(7) 『博物彙編掘報告』参照。

(8) 『郭店楚墓竹簡』第二二五頁参照。

(9) 今本『老子』には「太一」という語も「太一生水」と同じ文言もみえない。しかし、『莊子』天下篇には「以本爲精、以物爲粗、以有積爲不足、濔然獨與神明居。古之道術、有在於是者。關尹・老聃聞其風而悅之。建之以常無有、主之以太一、以濡弱謙下爲表、以空虛不毀萬物爲實。」とあり、老聃の思想的特徴を「太一」をもって表現している。また、『呂氏春秋』大樂篇には「道也者、視之不見、聽之不聞、不可爲狀。有知不見之見、不聞之聞、無狀之狀者、則幾於知之矣。道也者、至精也、不可爲形、不可爲名、彊爲之、謂之太一。」とあり、『老子』第一章や第二章との関連が窺えるうえに「道」と「太一」が関連づけられている。ちなみに、『尚書』洪範「一、五行、一曰水：」の正義には「易繫辭曰『天一地二。』此卽是五行生成之數。天一生水、…、此其生數也。如此則陽無匹陰無耦、故地六成水、…。於是陰陽各有匹偶、而物得成焉。故之成數也。」とある。

(10) 「崔駰論」参照。なお「郭談」では「太一生水」を関尹の著作としている。

(11) 「彭論郭店楚簡」は「另一組簡中有近一半的文字不見于通行本《老子》、另一半文字則見于《老子》。」とし、「國際研討會綜述」は「只讨论《老子》甲、乙、丙三組而忽略了《太一生水》与《老子》丙組的关系是一个重要的缺陷」という邢文の指

摘を載せ、「學術研討會述要」は「郭店楚簡《老子》丙組与《太一生水》当为一书」という李学勤の説を紹介している。

(12) 『郭店楚墓竹簡』公刊以後、「崔研究」が公刊されたが、崔氏のグループピングに変更はないようである。また、「丁枳析」は、竹簡の配列については、『郭店楚墓竹簡』によっているようである。

(13) 甲は、崔氏のいうところの《老子》(C)に当たる。

(14) 乙は、崔氏の《老子》(B)に当たる。

(15) 丙は、崔氏の《老子》(A)に当たる。なお、『郭店楚墓竹簡』【説明】では、第三章、第三章の間には「;」が置かれておらず一組となっている。しかし、釈文・注釈では別の組にしているようなのでおそらく単純な誤植であろう。

(16) 竹簡には何種類か符号がつけられている。「郭店老子」では「■」や「一」「~」などの符号がみられる。これらの符号の意味するところは定かではなく、同一の符号が必ず一定の機能を担っているわけでもなさそうだが、それらが今本『老子』の章の境界に置かれている場合は、一応それを分章の標識と見做すよと思われる。しかし、今本では独立した章であり、明らかに主題が変わっている場合であっても、竹簡には何の符号もつけられていないこともある。

(17) 「崔研究」降録の図版十八、「老子》(C)の第五組79の部分に「本簡損失无存」とあるのがそれである。

(18) 「馬王堆老子」甲本第六〇行、乙本二〇二行上参照。

(19) 第四八章に「爲學日益。爲道日損。」とあり、第五章に

「古之蓋爲道者。非以明民。將以愚之。」とある。

(20) 第三二章を、王弼注本が「天下莫能臣也」、傅奕本が「天下莫能臣」と作るのに対し、河上公注本・想爾注本は「天下不敢臣」に作っているように、「能」と「敢」がテキストによって併存している場合もある。

(21) 「天道は弱(弱)を貴び、成(性)を雀(削)る者以(およ)び生を益す者は、強(強)に伐たれ□に責められ:」。『郭店楚墓竹簡』では、「雀」を「爵」の仮借とするが、その【注釈】「一六」にみえる裘錫圭氏の按語に従い、「削」の仮借字とする。「雀」「削」はともに薬部であり仮借可能。また「成」は「性」の仮借とする(両字はともに耕部で仮借可能)。『郭店楚墓竹簡』では、欠字部分を「:」に作るが、周りの竹簡からその欠字数は七、八字であると思われる。

(22) 「下は土なり、而してこれを陸(地)と胃(謂)う。上は、旣(氣)なり、而してこれを天と胃(謂)う。道も亦た丌(其)の名に旣(託)す、古(故)に事は成りて身は長ず。聖人の事に従うや、亦た丌(其)の名に旣(託)す、古(故)に衿(功)成りて身剝(傷)なわれず。天旣(地)名恣(字)並び立つ、古(故)に丌(其)の方を恣(過)ぎて、相い:由(使)めず:」

(23) 第二三号簡は、断簡により「上」字より下が欠けている。「」内は筆者が補ったもの。

(24) 「天」西北に「足らざる」は、丌(其)の下 高くして以て強(強)ければなり。陸(地) 東南に足らざるは、丌

(其)の上「低くして以て強(強)ければなり。上に足らざる」者は、下に余(餘)り又(有)り。下に足らざる者は、上に余(餘)り又(有)り。」

(25) もっとも、丙において今本の第一七章、第一八章相当部分はひとつの章として扱われているようである。というのは、その間には何の符号も置かれておらず、今本第一八章に相当する部分の冒頭は「故大道發安又愆義:」(丙・第二号簡)となっており、第一七章相当部分を承けているからである。これは「馬王堆老子」においても同様である。「彭分章和章次」参照。

(26) 「馬王堆老子」甲・乙はともに、「徳」38、39、41、40、42、43、:、65、66、80、81、67、68、:、78、79。「道」1、2、:、20、21、24、22、23、25、26、:、36、37という配列になっている。

(27) また今本『老子』第六四章前半・後半に相当する部分が「郭店老子」では甲Aと甲Dとに分かれてみえている。「馬王堆老子」ではすでに今本と同様一章になっているが、今本の配列の接続の悪さは金谷治『老子』(講談社学術文庫、一九九七年)第一九八頁において指摘されている。

(28) 『郭店楚墓竹簡』「前言」には「由於墓葬數次被盜、竹簡有缺失、簡本《老子》亦不例外。故無法精確估計簡本原有的數量。」とある。

(29) 「李残簡拼接」は、『郭店楚墓竹簡』図版七、第一〇八頁・残片二〇号簡の「是以建言又之明道女孛迟道女孛進」道若退」は、乙・一〇号簡に接合すべきものと指摘している。

(30) 『郭店楚墓竹簡』巻末に附せられた「竹簡整理號與出土號對照表」からもそのことが窺える。

(31) 『郭店楚墓竹簡』所収の『縑衣』は、今本『禮記』縑衣篇とはほぼ同様の内容であるが、今本が二四節からなるのに対して一節少ない。『縑衣』は四七枚の竹簡からなるが文意は通っておりやはり簡が一本まるごと欠けているような部分はない。また、各節の末尾に附された墨丁、第四七号簡に「二十又三」と記された節の合計数から、抄写された時点で今本より一節少ない二三節から構成されていたこと、盗掘による被害はなかったということが確認できる。「郭老子其人其書」参照。

(32) 但し、河上公本の注には「謂用道之君也」とあり、本来は「道」に作っていたとも考えられる。

(33) 「馬王堆老子」乙本・第二三〇行上。甲本はこの部分の帛が欠けている。

(34) 『戰國策』齊策四が「老子曰」として引く第三九章、『莊子』寓言篇が「老子曰」として引く第四一章、『淮南子』原道篇が老聃の言として引く第四三章、『史記』貨殖列伝が「老子曰」として引く第八〇章なども、このような状況をしめす例であらう。

(35) 「高説老子」は「我认为这3组《老子》皆非《老子》祖本原型、而且不是完本、都屬于《老子》经文的摘抄。」とし、「國際研討会綜述」は「甲、乙、丙三篇：是后人根据一种《老子》五千言的本子、为了教育的目的改編而成」という王博の説を載せる。それに対して、「池田論文」は、「郭店老子」を「すでに

完成している『老子』五千言の一部分などではなくて、今正に形成途上にある『老子』のもっとも早い時期のテキストである」とする。また「池田国際研討会報告」は、中国の研究者は多く「郭店老子」をすでに完成している『老子』五千言の一部と見做す傾向にあり、欧米の研究者は形成過程にある『老子』の原型と見做す傾向にあるという。

(36) 例えば、甲Aは寡欲・不欲・自然といった語を中心に無為の政治を説く部分が多い。これは、『老子』五千言から適宜摘抄したものと考えられるが、またそれこそが『老子』の原型であり、今本『老子』は後人による増改を経たものとも考えられる。

附記 本稿執筆にあたって、東京大学大学院教授池田知久先生より貴重な資料を提供していただいた。ここに記して深謝の意を表したい。

(筑波大学大学院)